

## 第一部 須田町一丁目中部町会にみる建造物の変化

### 1. 東京神田須田町一丁目中部町会

対象地は、かつての下町を中心であった神田の旧青果市場跡地である。1895年7月調査の「東京市神田区全図」（東京郵便電信局発行）によれば、現在の須田町一丁目中部町会のエリアは、当時の町名で連雀町・佐柄木町および雉子町の三つの町に跨っており、神田川にちかく、江戸の繁華街であった万世橋界限にも近接している。

ここは、隣の多町とともに、江戸期から明治・大正期を通じ、江戸・東京の台所を預かる青物市場の町であった。青物市場といっても、今日のような形態を持ったものではなく、一軒一軒の青物問屋が直接に生産者と取り引きし、都市の小売業者にそれを供給していた。だから、この町には、たくさんの青果物問屋が軒をならべ、早朝から昼までの間、たいへんな賑わいであったという。

（図1）（図2）（図3）（図4）はその当時の状況を示すものである。

この賑わいが終わったのは、1930年代である。昭和初期、関東大震災の復興計画のなかで市場の近代化が唱えられ、鉄道と直結する秋葉原駅に近代市場ができあがって、古い青物市場の歴史はおわりをつげ、仕事場と住居とが切り離されて、町から生産機能の多くが失われた。その上、1932年には、東京区制の改正にともなって、町の再編成が進められ、その結果、1933年には、上記の三町内は、それぞれ分断され、その一部が須田町一丁目として区画整理されることとなった。（図5）と（図6）とを見比べると、その変化がよくわかる。現在の須田町一丁目中部町会エリアは、この区画整理と靖国通りの付け替えによって、初めてできたものである。

第二次世界大戦によってふたたび火災の犠牲となった神田のなかでも、このエリアは、その後特異な変化を見せた土地である。すなわち、まず靖国通り沿いにたちまちうまれた露天商のなかで、電器関係の業者が特化し、それがその後秋葉原へうつって、電器街を形成する。また、戦後の衣類の欠乏のなかで、戦前からの羅紗業者が町内東側の部分に集結し、ここに羅紗問屋の街をつくりだした。こうして、かつての青物の街は、青果組合関係者の家と羅紗業者、それに近隣買い回りの小商店の町へと変化していった。しかし、それも一時で、羅紗業者は、1960年代からは、しだいに再編成されて街を退去していき、青物関係者もしだいに少なくなって、町は静かな住宅地に変わっていった。この静けさを破ったのが、1980年代のビル・ラッシュと地上げである。

日本橋・丸ノ内、あるいは渋谷・新宿・池袋といった再開発の中心地からは



図1. 神田と当該地区の変遷（1）

明治28年7月調査の「東京市神田区全図」（東京郵便電信局発行）



図2. 神田と当該地区の変遷（2）

明治40年調査「東京市十五区番地界入地図神田区」（東京郵便局発行）

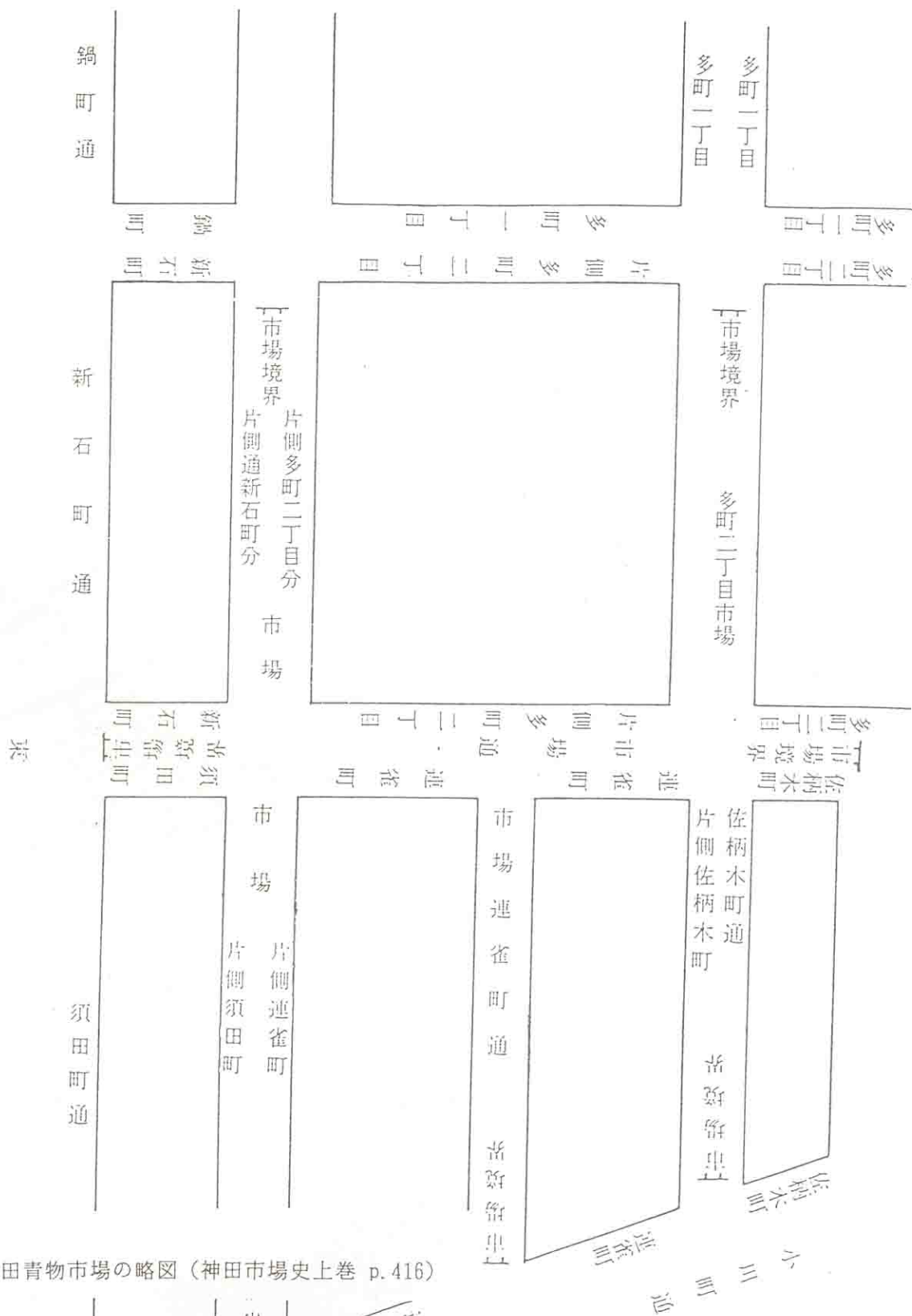


図3. 神田青物市場の略図 (神田市場史上巻 p. 416)

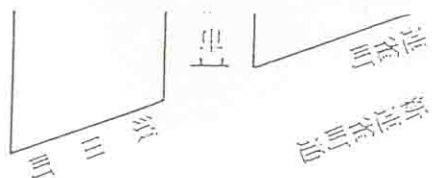




図4. 大正元年版 神田区地籍図 (東京市区調査会) 連雀町・須田町



図5 神田と当該地区の変遷(3)

昭和5年7月「神田区全図」(内山模型製図社)



図6 神田と当該地区の変遷(4)

昭和7年「大東京分図三十五区之内神田区詳細図」(東京地形社)

ずれていた神田周辺は、土地投機の絶好の対象として狙われ、強烈な地上げが始まったのである。その顕著な例として、対象地に隣接する淡路町角では、地上げに応じなかった店舗に暴力団が放火し、力で奪い取ろうとする騒ぎが起きている。

地域の住民組織にも、江戸末から現代までのこうした変動が反映し、変化が見られる。江戸期にあった連雀町・佐柄木町および雉子町のうち、雉子町では、すでに明治初めの1889、1890年に、武家地との合併がおこなわれている。また、この時期には、連雀町と佐柄木町との間でも、境界の変更がおこっている。そして、その後もいくつかの変更があったが、第二次世界大戦前のこのエリアには、義勇会・親交会・連雀会の三つの町会が存在した。神田区役所発行「神田区勢要覧」（1935）によれば、その範囲はつぎのとおりである。

義勇会はその本部を六番地におき、四番地・六番地の全部と二番地・八番地・十番地の一部とを含むもので、隣接の司町二丁目の一部にもまたがっていた。会員の家数は、170 であった。

親交会はその本部を八番地におき、二番地・八番地・十番地の各表通り側であった。会員の家数は、27であった。

連雀会はその本部を十番地におき、十番地の一部と十二番地の全部とで構成されていた。会員の家数は、54であった。

現在の須田町一丁目中部町会は、こうした経緯の上で第二次世界大戦後の混乱のあとから生まれたものである。境界部分では、他の町会と入れ代わったところもあるが、基本的には、上記の三町会のエリアを受け継いでできている。街路も靖国通りの付け替え、外堀通り、中央通りの完成によって、これらの幹線が境界をなし、そのなかで、かつての町内の通りを基本にした道が昔ながらの番地を継承している。

住民もまた、江戸初期からの酒屋・漬物屋として名高い「小田原屋」をはじめ、江戸期以来の青物問屋であった屋号を残すものや、第二次世界大戦以前からの米穀商など古い家もすくなくないが、その家業をそのままに受け継ぐものはほとんどない。